

氏 名 いち かわ み か こ
市 川 美 香 子
学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
学 位 記 番 号 論 文 博 第 446 号
学位授与の日付 平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目 ヘンリー・ジェイムズの語り
——一人称の語りを中心に

論文調査委員 (主 査)
教 授 中 村 紘 一 教 授 若 島 正 助 教 授 佐 々 木 徹

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、ヘンリー・ジェイムズの作品に見られる視点の手法について、特に語り手の人称が語りに及ぼす効果を中心として、真正面から取り組んだものである。視点の手法は、一個の視点は多数ある視点の中での一個の視点に過ぎないという、ジェイムズの認識を基盤とする。その認識は、逆説的に、根源的に不安定な世界に対峙するために彼が取った唯一の手段であった。それを視点手法という形で小説技法に取り入れた結果、ジェイムズは二十世紀モダニズムの先駆者と見なされることがある。しかし、作品批評において、視点の手法の問題はこれまでおおまかにしか把握されていない。その上、ジェイムズは十九世紀の小説家としては確かに革新的であったが、彼の手法は、旧来の語りの手法とモダニズム以降の手法の中間に位置するにすぎず、彼はモダニストであったとも言いがたい。にもかかわらず、ジェイムズはしばしばモダニズム以降の知見をもって自己矛盾という弾劾をも受けてきた。本論では、ジェイムズの視点の手法を、語りの人称という面から本格的に検討することによって、旧来のジェイムズ批評の不備を補うものである。

ジェイムズの語りにおける人称の問題については、彼が『使者たち』に付した序文で一人称の語りの不備を指摘したことから、彼は一人称の語り手を設定することには否定的であるとおおむね見なされてきた。だから、彼の指摘が実は長編の語りに関するものであり、短編についてはそのほぼ半分を一人称の語りが占めているという事実も大して注目されてこなかった。また、それら短編において語り手の人称が語りに影響を与えているか否かについても、ごく少数をのぞいて、ほとんど論じられることがないまま今日に至っている。

本論第一章「語りと人称——人称は語りの効果を変える」において、論者はまず、語り手の人称を論じる場合に陥りやすい誤謬を指摘した。すなわち一人称あるいは三人称の語り手という場合、それぞれ「人称」の意味が異なるのに、それが正しく認識されないことがある、ということである。一人称の語り手とは、作品世界の中に登場する人物が語る場合を言うのに対して、三人称の語り手は作品世界の外に位置し、作品世界の登場人物すべてを三人称で言及する役柄である。三人称の語り手が作中に一人称で顔を出すとそれは常に〈侵入〉と呼ばれ、起こるべきでないことが起こったとされる。つまり、同じ「人称」という言葉を使いながら、一方は語る側の人称を言い、他方は語られる側の人称を言うのである。

さらに、論者は、マクノートンに倣って、語り手を、三人称の語り手（報告者）、報告者／観察者としての一人称の語り手、参加者／報告者としての一人称の語り手、という三区分に分けた。

語り手の問題にまつわる混乱をそのように整理した上で、論者は、語りにおける視点人物の人称を頭の中で変えながらテキストを読むという方法を考案し、その方法によって、ジェイムズのある作品（「嘘つき」）の語りを検討し、三人称と一人称の語りには歴然とした相違があることを指摘した。

まず、三人称の語りにおいては、語り手と視点人物は同一人物ではないため、内容が語られる順序の操作は、視点人物ではなく語り手にゆだねられる、したがって語りには視点人物の視点を越えた部分が発生し、その部分については絶対的客観性が生まれることを論証した。語り手は常に視点人物より上位の視座 *vantage point* に立つので、必然的に、視点人物より大きなパースペクティブをもつに至り、それが語りに客観性をもたらすのである。さらに、論者は、一人称の語り手は語る

内容に自己検閲を行なわなければならないこと、したがって、三人称の語りによって描出される視点人物の想念の方がむしろモダニズム以降の内的独白に近似すること、などを検証した。

このように、テキスト内における語り手と視点人物の距離を厳密に測りながら作品を読み、新解釈を打ち出すというのが本論の基本方針である。解釈に際しては、すべてがテキスト内で完結すると見るのではなく、作品執筆時や時代設定などの背景を考慮に入れた。最近の新歴史主義的文学批評は、時には作者を無視しテキストさえ社会史考察のための参考資料としてしまう誤謬も犯すが、反面、作者個人にまつわる伝記的事情あるいは作品の社会的背景としての歴史が作品世界に与える影響の大きさに気づかせた、という利点をもつ。本論では作品解釈を深めるべくそのような利点を取り入れた。

第二章、第三章においては、まず、「一人称の語り手は嘘をつかない」という命題から派生する諸問題を検討した。「一人称の語り手は嘘をつかない」というのは、従来の批評では無視されてきたが、あたりまえの前提である。すなわち一人称の語りであっても、語り手は、視点人物と報告者という二重の役割を担うので、報告者としての語り手は嘘についてはならない。なぜなら、フィクションは元々〈嘘〉だから、報告者としての語り手が嘘をつく、元のフィクションは消滅して、別のフィクション＝嘘になるからである。語り手が作中のドラマに関与する参加者として、嘘をつくことはむしろあり得る。しかし、そのような場合、その嘘は必ず作中で露見させられなければならない。何かを隠したり、目立たせないようにしたいと思っても、その隠したり、抑えたりする行為そのものは記録されねばならない。一人称の語り手は、語るに落ちるか、語らずに落ちるか、いずれにしても落ちてしまうのである。

「アスパンの恋文」では語り手は語るに落ちる。これは語り手である編集者が、すでに死んで久しい詩人アスパンの恋文を元恋人から譲り受けようと算段する物語である。ジェイムズはニューヨーク版での加筆によって、語り手の無節操ぶりをくどいまでに強調する。しかし語り手は同時に、ヴェニスやそれが表象する過去に対して郷愁に浸り、作者自身の代弁をしているのではないかとさえ思われる。この二面性はこれまで批評家を悩ませてきたが、論者は、この男の視力が可変性を持ち、彼は対象が十分遠い場合にはよく見えるのに自分自身のことは全く見えないという意識構造をもつことを明らかにした。語り手が呈示する物語には、陽画に対する陰画のように、彼の無知・無自覚ぶりが寄り添う。彼が雄弁に語れば語るほど、語られないことも強調される。語り手は、語るに落ちるのである。

反対に、語り手が語らないことによって落ちるのが、「本物」が見せる展開である。語り手である画家は、零落した上層中産階級の少佐夫婦を挿絵のモデルとして雇用するが、うまく行かず、最後に金を余分に与えて縁を切るという話である。本論では、画家が、自分の階級の上昇志向についても、その裏返しとしての上層階級に対する劣等感・反感、さらには、少佐夫婦に対する個人的劣等感・反感についても、一貫して語らないことに注目した。それによって、この作品のテキストには、画家が雄弁に語ることによって呈示しようとする美談と、彼が沈黙することによって逆に露呈してしまう隠微な復讐譚の二つが潜んでいることを解き明かした。そして、画家は性格を描き出す〈本物〉の芸術家すなわち肖像画家にはなれなかったが、ジェイムズは画家に語らせ、かつ、語らせぬことによって、複雑な性格描写をやったのけたことを論証した。

第四章で扱った『ねじのひねり』は、ジェイムズ作品の中ではおそらくもっとも有名でほとんど論じつくされた感さえある。しかし、論者はこの中編の幽霊譚について未解決の基本的疑問を取り上げて、一人称の語りという観点から解けることを論証した。その疑問とは、幽霊となったクイントは邪悪であると決めつけられているが実際どんな悪徳行為を行なったのか、マイルズはなぜ死ぬのか、という旧来答えられることのないままにきた二つの謎に加えて、家庭教師はなぜ語るかというこれまで問われることさえなかった基本的謎である。

作品の中心となる手記の書き手である家庭教師を、死んだクイントは「見つめ」続けた。その行為は、家庭教師側が「見つめ返す」ことによって〈誘惑〉となった。これが、死んだクイントの犯した悪徳行為である。むしろ、この通りに語られているわけではない。これは、「恐怖しても許される」などという言辞の不自然さなどに注目してテキスト分析を行ない、家庭教師がこの「見つめあい」をひた隠しにしていることを明らかにすることで検証された結論である。

さらに、一人称の語りの基本点、すなわち、語り手が当然視していることは、特異なことであっても、そのまま、説明・弁明なしで現れることや、語り手に見えていないことは語りにも現れないということを踏まえて、マイルズの死の謎を解明した。また、家庭教師はなぜ語るかという謎については、彼女の手記の傲慢にして愚かしいほどの〈正直さ〉に注目した。一人称の語り手は正直であるという鉄則は、作者と読者の間の問題であって、作品世界における彼女とその手記の読み手の

問題ではないからである。そして、彼女にとって自分自身の性癖、考え方などが完全な盲点となっていて、それが見えないまま真摯かつ空しい自問を続けることが、過度に正直な語りを生んだと論じた。

第五章で扱う『聖なる泉』は一見複雑に入り組んだ作品のようだが、実は単純なものではないかというのが、本章の主旨である。語り手は、恋愛関係においては片方が相手の若さと知力を吸血鬼のように吸いとり、他方はそれらを吸いとられた分だけ失うという仮説を立てる。作品は、その仮説証明のための推理が客観的確認を得ることがないまま延々と続くという代物である。ジェイムズが、長編における一人称の語りは「恐ろしく流動的な自己暴露」を招くと言った通りである。これまでの批評は吸血鬼理論の当否を論じるなど、いわば語り手の手中にはまりこんでしまった感がある。しかし、本論では、語り手が自分の立てた仮説に異様なまでに執着する動機に注目し、その仮説が社交界における彼の基本的不安感に由来すること、また、仮説を立証しようとする動機は、優位に立つ相手の若さ、容姿、知力に対する嫉妬にあることを論証した。

第六章『ポイントンの戦利品』——オウエン・ゲレスの集団無意識——は、本論で扱う唯一の三人称の語りである。作品に関する従来の批評は、フリーダ・ヴェッチの心理理解に終始し、その背景となるゲレス家の男たちは吟味されることがなかった。視点人物であるフリーダが、男たちの動静を絶対的所与として深くは問わず、それに関する記述がきわめて少ない、つまり、語られないからである。作品解釈においては、「道徳的ヒステリー」症と評されるほどのフリーダの心理が謎とされるが、オウエン・ゲレスの心理もまた謎である。論者は、オウエンが最後にフリーダに寄越す手紙の舌足らずぶりに見られる〈甘え〉に、オウエンの謎を解く鍵を見出す。この甘えは、ヴィクトリア朝男性が女性に対してもっていた集団無意識の表われであり、オウエンは、女性ならば〈男〉の気持ちを分かってくれるはずだと思い込む幼稚症 *infantilism* の事例なのである。そして、女性たちもまたその集団無意識に加担して、自己陶醉に浸る、だから、オウエンの無意識とフリーダの自己陶醉は表裏一体を成すのだと論じた。

第七章、第八章で、論者は、ジェイムズの自伝第一巻『少年と他の人々』を文学作品として読み、また自伝に現われる、構成上の特徴、文体などをジェイムズの意識の様態の現われだと見て、分析した。

文学作品として読むと、自伝第一巻の主題は「教育」であり、主要モチーフは世界観の反転であり、「荒波」と「いかだ」がそれらを表わす基本イメージとなる、と論じた。ジェイムズ家の父ヘンリー・シニアは特異な教育方針をもち、子供たちに対して、物理的にも精神的にも定住を許さなかった。また、世界が危険に満ちていることを、幼い子供たちに語って聞かせて、少年ヘンリーの世界観を決定するのに大いにあずかった。少年の成長はそのような荒波を乗り切ることを学ぶことによってもたらされる。少年は今や「冒険的生」を選びとり、生を徹底的に肯定することを選ぶのである。

さらに、この自伝において、ジェイムズが一人称の語り手として思うさま自由にふるまった結果、作品は特異な脱線構造をもつに至る。論者は、その脱線構造を図示することで、一見恣意的とも思える作品構成は記憶そのものの形を描き出すという離れ業だったのだということを明らかにした。

次いで、ジェイムズの意識の様態には全視性とも言えるべき特徴があり、それは途方もなく巨視的であると同時に微視的にもなりえる精妙な言語感覚を生み出したことを、文体からさまざまな例を引いて検証した。

ヘンリー・ジェイムズの研究は視点の手法にはじまり、視点の手法につきる。不安定な世界観の荒波に翻弄されながら、確とした視点を把握する——ジェイムズが実人生において身をもって示したことがそれだったとすれば、それはまた難解なジェイムズの作品がいまだに読み続けられるゆえんなのである。

論文審査の結果の要旨

「ヘンリー・ジェイムズの語り」と題する本論文は参考論文8編を添えるが、主論文は「一人称の語り」が行われている作品を中心に論じている。かつてジェイムズ自身が一人称の語りの難点を指摘したせいもあって、これまで、短篇のほぼ半数がその語りである事実はあまり注目されず、ましてそれらが論じられることは決して多いとは言えなかった。また、物語論の研究者たちは一人称の語りに関する問題に詳しい考察を重ねてきたが、その成果がジェイムズ作品に応用されることもほとんどなかった。本論は、こうした旧来の研究の不備を補うべく、視点の手法と一人称の語りの関係からジェイムズの諸作品を再検討し、新たな解釈を打ち出そうとするものである。

そのための議論をするにあたり、本論が第一に立てる命題は「一人称の語り手は嘘をつけない」である。一人称の語り手

は声高に語ることによって、あるいは、沈黙することによって何かを隠そうとしても、語られる内容を子細に検討すれば、それは必ず露見するというのである。前者の場合は語り手は語るに落ち、後者の場合は語らずに落ちる。以下、その実例を挙げる。

短篇「アスペンの恋文」(“The Aspern Papers,” 1888)では、語り手は敬愛する詩人アスペンの死後、その恋文の編集を思い立ち、それを卑劣な手投で手に入れようとする。その言い訳として自分がいかに文学的教養があってその仕事の適任者であるかを語るが、その際、語り手が引用するシェイクスピア作品についての知識はかなりお粗末であることが露呈する。この場合、語り手は語るに落ちたのである。これまでに見過ごされてきた語り手の文学的無知という側面に注目することによって生みだされた解釈である。

語り手が語らずして落ちてしまったのが、短篇「本物」(“The Real Thing,” 1892)の場合である。挿絵画家である語り手は、肖像画に失敗したにもかかわらずモデルの貧しい少佐夫妻には過分の報酬を与えたという話、一種の美談を語る。ところが、論者は、ここで語り手が自らの、挿絵画家から肖像画家になりたいという階級の上昇志向や少佐夫妻の属する上流階級に対する劣等感・反感については終始語らないことに注目して、雄弁に語る美談の裏には、沈黙によって逆に発覚してしまう隠微な復讐譚が潜んでいるのではないかという解釈を色濃く提供する。そして、そのような語りの中にこそ、作者ジェームズは、「本物」の肖像画家になり損ねた語り手の屈折した性格を見事に描くことができたと言者はいう。

ジェームズは長篇における一人称の語りは「恐ろしく流動的な自己曝露」を招くと言ったにもかかわらず、『聖なる泉』(The Sacred Fount, 1900)のこれまでの批評は、もっぱら語り手のいう吸血鬼理論の当否を論じるばかりであった。しかし、論者は語り手がその理論に異常なまでに執着する動機を考察して、それが社交界のライバルに対する嫉妬にあると説く。自分よりも優れたライバルの若さ、容姿、知力は生来のものでなく、恋人から吸血鬼のように吸い取ったものだという理論を、語り手は延々と推理・実証しようとするが、そうすればするほど語るに落ちてしまうというのである。

論じ尽くされた感さもある中篇『ねじのひねり』(The Turn of the Screw, 1897)にも、論者によると未解決の疑問がいくつあるという。それらは、幽霊となったクイントの悪徳行為とは何か、マイルズの死因は何か、そして、そもそも家庭教師はなぜ語るか、である。それらの謎を解くために論者が新しく視野に入れるのが、語り手である家庭教師の歴史的・文化的背景である。この家庭教師はヴィクトリア朝社会の優等生として当時の階級やジェンダーに関する文化コード(リスペクタビリティ・コード)の一切を盲信している。そんな彼女にとってクイントの罪とは階級制度を蔑ろにしたことにあり、マイルズが死んだのは世間体を繕うばかりの家庭教師からは必要な愛情を受けることができなかったからであり、家庭教師がこの物語を繰り返し語るのは、そうすることが階級的に下位の者が上位の者に認められる唯一の方法であると信じ続けたからであるというのが論者が独自に用意した解答である。家庭教師も語るに落ちていることになる。

『ポイントンの戦利品』(The Spoils of Poynton, 1896)は三人称の語りの作品であるが、論者がこれを本論で扱う理由は、視点人物の女性フリーダの意識がやはりヴィクトリア朝社会のジェンダー・コードにすっかりはまってしまっていると考えからである。オウエン・グレスがフリーダに寄越した舌足らずの手紙には〈甘え〉があると論者は見て、これをヴィクトリア朝男性に潜む、女性に対する集団無意識の表れと論じる。そして、フリーダがこのことに反発するどころか黙々とオウエンに献身するのは、彼女もまたその集団無意識に加担し、自己陶醉に浸っていることになるという。彼女は語らずして落ちている。

これらの作品論に見られるように、論者は、テキスト内における語り手としての役割と登場人物としての役割との間に存在する距離を厳密に測るという小説の美学に準拠すると同時に、社会的背景としての歴史が作品世界に大きな影響を与えるという最近の「新歴史批評」の長所も取り入れて、新しくかつ深みのある特有の作品解釈を編み出した。そのことは評価されてよい。

ただし、ジェームズの自伝『少年と他の人々』(A Small Boy and Others, 1913)の作品論には不満がないわけではない。この作品の文学性、語りの脱線構造、特異な言語感覚と文体などについての論者の主張や分析それ自体は、確かにユニークでありかつ鋭く、魅力的である。しかし、論者は他の作品の分析では厳密であるのに、ここでは一人称の語り手と登場人物ジェームズとの間の距離を必ずしもきちんと測れていない憾みがある。自伝といえども、あるいは、自伝であるからこそ、この語り手にも雄弁、あるいは沈黙によって、不都合なことを隠そうとしたものが具体的にあったはずである。それが何で

あったか、その好奇心を満足させて欲しかった。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2003年1月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。